

海外における日本語教育の現在

高須奈緒美

今日は、「海外における日本語教育の現在」という大きなテーマのもとで、日本語能力試験についてお話しします。日本語能力試験、略称 JLPT は、2010 年から新しく生まれ変わりましたので、そのあたりの最新情報や、国際文化交流事業としてその試験を行うことの意味などにつき、お話しできればと思っています。

日本語能力試験は、「日本語を母語としない人」― 母語というのは母国語、マザータングのことですね― の日本語能力を測定し、認定する試験として、27 年前、1984 年に始まりました。海外での日本語学習者は現在 365 万人といわれていますが、日本語能力試験はそういった学習者や、仕事や勉強で日本語を使ったり、日本語を教えたりしている人も含め、毎年 60 万人以上が受験する、世界最大の日本語試験です。今日はその日本語能力試験のことを話すのですが、その前にまず、日本語とは何か、日本語という言葉は何のためにあるか、ということについて考えてみましょう。

【文化を映す鏡としての日本語】

「古池や かはづ飛び込む 水の音」

有名な、松尾芭蕉の俳句ですね。ちいさな池に一匹のカエルがぽちゃん・・・と飛び込む。夜でしょうか。その音がしーんと静まり返った中にひっそりと響きわたる。いい俳句です。・・・でも、ちょっと待ってください。本当にカエルは一匹か。池はちいさいか。日本語には単数と複数の区別がないから、カエルじゃなくて「カエルズ」かもしれない。池だって、上高地にある大正池みたいな、大きな沼かもしれないでしょ。そうすると、でっかい池に、真昼間の明るい日差しを浴びて、でっかいカエルたちがどぼん、どぼーんと飛び込んでいるかもしれない。そう翻訳しても間違いとは言えないですよ。

でも、私たちは当然のように、池はちいさくて、蛙は一匹だと思う。それをひとりで、ひっそりと聞いた人がいた。ちょっと薄ら寒い夜の風景かな、少なくとも夏の真昼間のできごとじゃないな、そんなのあたりまえじゃないか、と思う。日本人の身体に染み付いた季節感、空間イメージ、音の感触など、私たち

にとって「あたりまえのこと」を暗黙の了解として、私たちはこの俳句の味わいを理解する。そして外国語の翻訳でも、その味わいが、読む人に伝わってほしいと思う。このような、日本語を母語とする私たちにとって、「あたりまえのこと」、これが日本語が背負っている「文化」です。その意味で日本語は、「日本文化を映す鏡」であるといえます。

それじゃ「日本語を母語としない人たち」が「日本語を学ぶ」とはどういうことか。

彼らにとって、日本語は外国語です。日本語でない別の言葉、英語とかフランス語とかチェコ語とかバスク語とかスワヒリ語とかゾンカ語とかシンハラ語とか、とにかく日本語でないナントカ語が、母語です。そして、その言葉を毎日使って生活している彼らにとっては、そのナントカ語が背負う文化が「あたりまえのこと」なのです。それは、もしかしたら、「蛙」といえば、たくさんの大きなガマガエルが勢ぞろいしていることだったり、「池」といえば、海のような湖だったりするかもしれません。そういう異なる「文化」が、少なくとも世界中の言葉の数だけあることになるわけでしょう。おまけに気候や風土によっても文化環境は変わりますから、アメリカとイギリスとオーストラリアが同じでないように、単純な言語の数よりもさらに多い「文化」があることになりますね。2009 年の国際交流基金の調査によれば、そういう「異文化を背負った人たち」の中の、少なくとも 365 万人が、現在日本語を勉強している。そして、世界中で毎年 60 万人以上の人たちが、日本語能力試験を受験する。これって、すごいことだと思いませんか。

世界には、本当にさまざまなテーマで日本のことを研究している人たちがいます。海外における日本研究、とりわけジャパノロジーと言われる「日本学」は、研究者が日本語を通じて深い日本理解を得ることから発展していきました。また、日本文学は、万葉集、源氏物語から村上春樹に至るまで、あらゆる時代の作品が各国語に翻訳されていますが、翻訳という作業も、言語の知識と文化理解が合体して初めて生まれます。さらに言えば、最近の若い人たちの日本のアニメやマンガへの関心についても、ズギューン！とか、ウッソー、みたいなオノマトペや若者言葉も含めて、日本語でそのまま読んだり見たりすることで、直接日本のポップカルチャーに触れ、日本の若者の感覚と直接つながっている、という「時間差のない共鳴」が、その大きな動機になっているといえないでし

ようか。

【コミュニケーションの手段としての日本語】

言葉には、「文化を映す鏡である」という以外に、もうひとつ、重要な機能があります。それは「自分が他人とつながること ーつまりコミュニケーションーのための手段」であるということです。日本人と話す、外国人同士が日本語を使って話す。あるいは日本語で自分の意見を書いて発表し、意見交換する。コミュニケーションの形はさまざまだと思いますが、いずれにしても、日本語という言葉を使って、人と人がつながる、お互いに分かり合う、ということですね。私が2年半暮らしたアフリカのセネガルでも、道を歩けば「コンニチワ」とか「アリガト」とか声をかけられて、まあ、たいていはそれだけしか言えないのですが、こっちが「こんにちは」と返すと「ヤッター！」という顔をして、そのあとはフランス語で話しかけてくる。日本語での言葉のキャッチボールが1回成り立っただけですが、それでも、「日本語というものを使って、日本というものに直接参加してみる」ことの入り口には立った。もちろんそれを深められるかどうか、は別の話です。

ひとつエピソードを紹介しましょう。ときは1989年、ところはベルギーのブリュッセル。ベルギーには2年毎に開催される「ユーロパリア」という芸術祭があります。毎回ひとつの国を選び、その国の文化を1年間にわたってさまざまに紹介する祭典です。1989年は日本がヨーロッパ以外の国で初めて代表国に選ばれ、「ユーロパリア・ジャパン」として開催されました。岡先生もそのときには、国際交流基金におられて、展覧会などを手がけられたかと思います。歌舞伎あり、能狂言あり、国宝を含む大規模展覧会ありの、大変大きな規模の催しでした。その目玉事業のひとつに文学シンポジウムがありました。大江健三郎さん、中上健次さんら、日本を代表する作家がベルギーに集まって、ベルギーの作家と議論したのですが、ご存知のようにベルギーにはフランス語、フラマン語、ドイツ語と、国語が3つありまして、憲法も3ヶ国語でかかれています。それぞれの言葉を話す人たちは、お互いに仲が悪かったり、必ずしもみんなが全部の言葉に流暢なわけではなかったりする。このシンポジウムのときも、通訳もフラマン語（オランダ語）とフランス語の両方でした。同時通訳を務めたのは、ふたりのベルギー人日本研究者。いずれも国際交流基金の日本研究フェローで、フランス語の方は歌舞伎の女形の研究者、フラマン語の方は大江健

三郎の研究者でした。

作家たちが好き勝手に話すことを、それぞれの言葉で見事に通訳し、休憩時間にほっと一息、レオニダスのチョコレートをつまみながら一あれは白い四角のヘーゼルナッツのが一番美味しいんですが、まあそれはともかくとして、ふたりが楽しそうに話している言葉は・・・日本語だったんですね。片方はフラマン語を話したくないし、フランス語を話す人の常として、英語はあまり上手じゃない。もう片方は、英語はうまいがフランス語は苦手なので、フランス語では話したくない。同じベルギー人であるにもかかわらず、彼らは「共通の『母語』」がなかった。「日本文化の専門知識と、その日本語による表現能力」は共有していますから、彼らにとっては日本語が、豊かで深いコミュニケーションの最も有効な共通手段でした。

国際交流基金は『国際交流』という雑誌を 1970 年代から発行しており、その中で「国際交流と日本語」について数々の特集を組んでいます。例えば「世界のなかの日本語」(1979)、「国際化する日本語の座標軸」(1986)、「国際接触における言語の役割」(1987)、「日本語教育の現状と未来」(1989)、「ひらかれた日本語」(1999)、「国際対話能力としての日本語の可能性」(2002) などです。これらでなされている「今、なぜ日本語か」という問いかけは、21 世紀になった今も輝きを失っていません。試みに印象に残る言葉をいくつか引用してみましょう。

「語学は人間と人間との心をつなぐためにやるのである」(外山滋比古、1975)

「日本語は、もはや日本人の所有物でなくなりつつある」(梅棹忠夫、1986)

「日本語はそれを話す人々のそれぞれ別個の文化を背負っている」(西江雅之、1987)

「人に何を伝えるか。学習者は自分の気持ちを伝えたいと強く思うはず」(水谷修、2002)

「国際交流」は、ウェブマガジン『をちこち』がその成果を継承しています。先の 4 月号に、私も JLPT のことを寄稿しましたので、よかったら読んでみてください。

【国際文化交流＝コミュニケーション】

さきほど「コミュニケーション」とは、自分がほかの人と「つながる」ことだ

と言いましたね。それじゃ、「誰と」「どう」つながるか。気持ちが通じて新しい関係を築く相手が、さきほど言った「あたりまえのこと」が全く異なる人かもしれない。その人のおかげで知らなかったことを知り、びっくりし、感動し、新しい価値に目覚め、それを自分と「あたりまえのこと」が同じ人たちに、「こんなに面白いことがあるんだぞ」と知らせることで、「つながり」は広がっていく。「面白いこと」は、日本語そのものだったり、文学だったり、映画や演劇だったり、生け花やお茶、書道、料理などの生活文化だったり、社会評論や文化論の記事やインタビューだったり、アニメ・マンガ・J ポップ・ファッションなどなど、たくさんある。

日本語を母語としない人たちは、日本語を学ぶことで、あるいは日本文化に直接触れることで、これまで知らなかった日本を、日本人を、文化を、社会を、もっと知り、もっと深く理解できるようになる。私はこれを、化学反応だと言っています。新しいものに出会う⇒驚く⇒理解する⇒もっと深く理解する⇒新しい価値観が出来る⇒つまり、変わる。⇒変わったところからまた新しいものに出会う⇒また驚く⇒理解する⇒もっと深く理解する・・・以下同文、繰り返す。というわけです。相手も同じように変化するわけですから、お互いに変わる、新しい価値を見出す、という化学反応が起こっていますよね。日本語に、日本に直接触れて、その感動と知的興奮を実感し、その感動を日本語や日本文化を知らない周りの人たちと共有したい。この欲求は、人間の「心の本能」ともいべき、「知的好奇心」です。そしてその知的好奇心の、国や母語を超えた共鳴、その連鎖反応、つまり「循環する化学反応」が、「国際文化交流」というコミュニケーションなのです。

コミュニケーションには「言語によるコミュニケーション」と、「必ずしも言語によらないコミュニケーション」があります。言葉によるコミュニケーションは、日本語の会話などのほかに、日本研究や、文学・映画・演劇などもそうですね。他方、音楽・絵画・写真、あるいはダンスなどの身体表現は、「必ずしも言語によらない」コミュニケーションといえるかと思います。言葉の介在がなくても、私たちはその美しさや、作り手が作品にこめたメッセージを感じ取り、感動する。映画や演劇はこちらにも該当するかもしれませんね。いずれにせよ、どちらの場合も、相手と気持ちが通じ、同じ価値を共有し、ああ美しい音楽だな、ああこの人の言っていること、書いていることは面白いな、と相手と共鳴

する。そして同じように共鳴した人同士も、感動を分かち合う。そしてもっと別のことも知りたいな、とお互いに思う。こうした瞬間が「つながる」瞬間、つまりコミュニケーションが成立する瞬間だと思います。日本語は、この新しい価値の発見や創造の「触媒」となります。そうすると、日本語能力とは、国際文化交流のためのコミュニケーション能力である、と言えるかと思います。

【国際対話能力、言語コミュニケーション能力としての日本語能力】

ということで、ようやく日本語能力にたどり着きました。

一口に「日本語能力」といっても、ことは簡単じゃない。話すことはぺらぺらでも、全然書けない人、相手の話すことが全然理解できない人もいる。漢字はたくさん知っているのに、発音がへんてこだったり、文法の間違いだらけだったりする人もいる。よく「目型」「耳型」なんて言いますが、中国・韓国、台湾、香港などの漢字圏と、漢字圏でない国でも、日本語の勉強の仕方やその能力の「傾向」に、大きな違いがあります。母語や文化的背景などによっても、いろんなクセがある。間違えかたのパターンもいろいろある。

先日フランス人の友だちが……（屁の展覧会（発音、濁音区別等も同様）、ぷちぷち行く、シバシバする、ぐだぐだ煮る（オノマトペ）、牛肉のヌヅ煮、きんぴち牛蒡（カナ）

話が少しそれましたが、日本語の技能＝テクニクは、「読む」「聞く」「話す」「書く」の4つに分けられます。言語によるコミュニケーションは、この4技能の組み合わせによって行われる、ということになります。

でも、「コンニチワ」と「アリガトウ」しか日本語を知らなかったら、それが読めて聞けて話せて書けても、コミュニケーションは深まりませんね。つまり、これら4つの技能を使うためには、それを支える日本語の知識、つまり「言語知識」が必要です。言語知識は、かなや漢字などの「文字」、それらを組み合わせた「語彙」――外来語とかオノマトペとか四字熟語とかもそうですね――、それらを文章に組み立てる規則である「文法」などで構成されます。こうした言語知識を、実際の場面で「運用」する、つまり使いこなすことを「言語行動」といいます。先ほどの「読む」「聞く」「話す」「書く」という4つの行動がそ

れです。そして、これらの言語行動によって何をしたいかを「課題」または「タスク」、その課題を成し遂げること、つまりコミュニケーションを成立させることを「課題遂行」と言います。

ひとつ例を挙げましょう。留学生が交差点で財布をすられた。犯人は早足で向こうに歩いていく、たぶんアイツだ。どうもさっきから様子がおかしいと思ってたんだ。ちょうど近くにいたおまわりさんに駆け寄って、日本語が得意なその留学生はこういいます。「失礼します、おげんきですか。ワタシは外国人留学生です。今日は快晴なのでぶらぶらと散歩に出かけました。試験勉強で睡眠不足だったのでちょっとぼーっとしてました。そしたら・・・」なあんて言ったら、おまわりさんは目を白黒、スリはさっさと逃げちゃいますね。この留学生は、挨拶・敬語・漢字熟語・オノマトペなどの言語知識が豊富ですが、課題遂行のための言語行動が適切でなかったため、コミュニケーションは成立しませんでした。このときの課題＝タスクは、「財布を掏られたことを伝えて、おまわりさんに、あそこにいる犯人かもしれない人をつかまえてもらう」ということです。ですから、「あの人、私の財布、取った・・・と思う」でいいわけです。また、その後の事情聴取ということになれば、「財布を掏られたときの状況を説明して記録してもらう」という別のタスクのための、新たな言語知識と言語行動が必要になってきます。おまわりさんの質問を理解しなくてははいけないし、自分の名前や住所も書けないといけな。どんな財布だったか、いくら入っていたか、身分証明書やキャッシュカードが入っていたかなども、説明しなくてはならない。このように課題遂行には、その場面場面に応じた言語知識と言語行動の組み合わせが求められます。これが日本語能力です。

【日本語能力試験：日本語能力を測定し、認定することの意味】

いよいよ「日本語能力試験」の話になりました。

概要については、配布した「はやわかり」をご覧ください。1984年にオギャアと産声を上げてから、27歳になるまでの歴史が書いてあります。改めて紹介しますと、日本語能力試験（JLPT：Japanese Language Proficiency Test）は、「日本語を母語としない人」の日本語能力を測定し、認定するため、国際交流基金と日本国際教育支援協会の共同事業として、1984年に誕生しました。開始当初は15の国・地域21都市で受験者は約7千人でしたが、90年代後半から実施

地も受験者もうなぎのぼりに増え、2009 年には世界中の 54 の国・地域 206 都市で約 77 万人が受験する、世界最大の日本語試験に成長しました。そんな成長著しい JLPT くんですが、ずっと変わらない特徴としては、

- 「落とすため」でなく「受かってもらうため」の試験であること、
- レベルが複数あってきめ細かく能力を認定していること、
- 得点を出すだけでなく、合格・不合格もあること、
- 世界中のあらゆる学習環境にあるさまざまな日本語学習者がだれでも受験できること、
- その結果は大学入試や就職・昇進、日本への留学などにも広く活用されていること、

などが挙げられます。

JLPT は受験者の日本語能力を、さきほど説明した「言語知識」と「言語行動」に分けて、「文字・語彙・文法」という言語知識と「読む」、「聞く」の 2 技能に分けて測定します。読む試験を「読解」、聴く試験を「聴解」と言っています。60 万人以上が世界中で受験するので、「書く」「話す」能力を測る試験はいまのところまだできていません。試験はすべてマークシート方式での解答です。

JLPT の 27 年の歴史の中で、ごく最近、ふたつの大きな節目の年がありました。

ひとつは 2009 年。それまでは年 1 回、12 月にだけ行ってきた試験を、初めて 1 年のうちで 2 回実施するようになった最初の年です。そしてこの年は、旧試験のしめくくりの年でもありました。つまりもうひとつの節目は 2010 年、去年です。この年から「新しい日本語能力試験」が始まりました。旧試験を発展的に引き継いで、5 年以上かけて改善を検討した結果、内容や形式の大幅な改定がなされ、JLPT は新たに生まれ変わりました。また、新しい試験からは、試験問題を、国際交流基金日本語試験センターが制作するようになりました。なお、試験の実施・運営については、これまでどおり海外での実施を国際交流基金が、国内での実施を日本国際教育支援協会が担当しています。これらの改定プロセスには、岡先生も国際交流基金日本語事業部長として、深く関わっておられます。岡先生は、新試験の生みの親のひとりである、と言ってもよいかと思えます。

では、どのように新しくなったか。いくつか主なポイントを挙げてみましょう。

1. 「課題遂行のための言語コミュニケーション能力の測定」に重点を置いたこと。
2. これまで 4 つだったレベルをひとつふやして、5 レベルにしたこと。実施は年に 2 回、7 月と 12 月です。
3. 得点を、等化による尺度得点で表示したこと。
4. 震災の影響で少し遅れていますが、「どのレベルに合格した人が、どんなことができると思っているか」を大規模アンケート調査を行い、これを「日本語能力試験 Can-do 自己評価レポート」として公表すること。

新試験は、N1 が最もむずかしく、N5 が最もやさしいレベル。すべてマークシート択一方式で、得点は素点（いくつ正答したか）ではなく、「等化による尺度得点」で 0 点から 180 点までの範囲で表示されます。尺度得点とは、同じレベルのいつの試験を受けても、同一の基準で能力を測定できるようにし（「等化」といいます）、ひとりひとりの受験者の得点を、その解答パターンごとに、『共通の尺度（ものさし）』の目盛り上にひとつひとつ位置づけるものです。このため、各受験者の点数は、各試験の難易度から独立して能力を絶対評価として数値化したものとしての意味を持ちます。要するに、TOEFL がいつの試験を受けたかに関わらず、108 点取れば「TOEFL の 108 点」として独立した価値を持つものと同じですね。但し TOEFL のレベルはひとつだけですし、合格・不合格はありません。これは TOEFL が米国の大学で学ぶ、という限定された目的のための試験で、受験者の英語のレベルも概ね高いところに集中しているからですが、日本語の場合には初級から上級まで幅広い能力の学習者が受験しますし、その受験目的もさまざまですので、レベルがひとつではとてもその全部を測りきれない。そのため 5 レベルあります。なお、合否があるというのは、「受かって次のレベルに進む」インセンティブとしても役立っていると言えるでしょう。

試験の内容の改定についてもう少し説明します。「課題遂行のための言語コミュニケーション能力を測る」ということですが、これまでどちらかというと言語知識重視だったものから、丸暗記では対応できない、総合的な課題遂行能力を測る問題形式を導入して、「現実の場面で使う日本語」の能力の測定をめざしています。つまり詰め込み方式の試験対策だけでは正解できないもの、例えば、内容全体の正しい理解や、会話に参加したときのとっさの正しい反応、などを

問う問題を導入しました。聴解試験を例に取れば、まず「統合理解」。これはあるニュースと、それについて話し合っている会話の両方を聴く問題です。また、「即時応答」は、相手の発話を聴き取って、さっと正しく応答する、という問題です。改定内容の詳細は公式ウェブサイト「ガイドブック」として説明がありますので、一度覗いてみてください。

いくつか例題をやってみましょうか。N1 レベルの聴解問題です。

試験を年2回毎回5レベル、作って - 実施して - 採点して - 認定して - 通知するのは大変なことです。全世界で、さまざまな母語とさまざまな文化を背負った学習者が、数十万人規模でいっぺんに受験して、その能力を公平に測定して認定しなくてははいけない。そのための「科学技術」が必要になってきます。

日本語能力試験を車に例えれば、その車を運転する人の技量が一目瞭然で分かってはいけないわけです。運転が下手だったら車が動かない、運転があまり上手じゃないとよろよろ走る。走っても、坂道発進がちょっと苦手とか、車庫入れはものすごく上手とか、縦列駐車はまるでだめとか、技量の中身も分かる必要がある。JLPT という車のふたつの車輪は、言語教育測定の理論と日本語教育の実践。つまり、項目応答理論（IRT）や認知言語学、言語コーパス・データベースなどの最新テクノロジーと、日本語教育の現場で培われた勘というか匙加減というか、ネジを締める「指先感覚」という、デジタルとアナログの組み合わせです。へんな喩えですが、腕立て伏せとうさぎ跳びもしっかりやりながら、最新のスポーツ科学に基づく身体機能分析も行っている、というような感じでしょうか。

そして日本語試験センターは、JLPT という車の商品開発、組立て、販売、分析調査、広報宣伝部門などが一緒になった、総合プロデュース会社です。お客様は、全世界のあらゆる学習環境の中で、日本語を「学び」-「教え」-「使う」人たち。ひとりでも多くのお客様を獲得するため、日々、市場調査、商品開発、デザイン・設計、部品の調達、その部品の精緻な組み立て、品質管理、危機管理とクレーム処理などに取り組みます。新車発表会は7月と12月の毎年2回、常に同じ品質・同じ性能を保証。納期は決して遅らせられない（だって7月と12月は毎年めぐってきますから）。1台たりとも不良車は出せないし、ひとつ

でもネジの締め忘れは許されない。日本語能力試験は、文化の厳密な「ものづくり」であり、精密機械工業なのです。

それでは、国際文化交流の中で JLPT が果たす役割は何か。

JLPT の P は、「プロフィシエンシー」の P です。ここまで日本語を「覚えた」という「アチーブメント」じゃない、という形で対比されますが、「プロフィシエンシー」は「熟達度」、「堪能さ」などと訳されています。分かりやすく言えば、日本語を使って実際の場面でやりたいこと ― アニメを見たい、マンガが読みたい、ニュースを理解したい、ビジネスの交渉をしたい、村上春樹を読みたい、日本の歴史を研究したい等 ― が、どこまでできるかの「度合い」です。

さきほど「課題遂行」能力としての言語知識と言語行動について説明しましたが、プロフィシエンシーは、日本語が「わかる」だけでなく、学習した言語知識を、未来に出会うであろう現実場面で「使える」能力、つまり「未来志向」の能力だといえます。「言語コミュニケーション能力」は、その未来の課題遂行能力であるプロフィシエンシーの獲得に向けた手段です。つまりプロフィシエンシーとは、言語知識を高め、その知識を「読む」「聴く」「書く」「話す」ために駆使し、「日本語による課題遂行という知的複合作業の階段を上り続ける」エネルギーだと思います。

国際文化交流は、知的好奇心、つまり「知らないものを知りたい」という欲求に基づく、他者との化学反応の連鎖だと言いましたね。日本語を使って課題をひとつ遂行すれば、次の課題と上るべき階段が見えてくる。「やりたいこと」「面白いこと」はますます増え、内容も深まり、その課題遂行には、新たな複合的能力が求められるようになる。マンガが読めれば十分、と思っていた若者が、村上春樹や源氏物語を、原文で読んだりするようになるかもしれない。アニメが見たかった学習者が、ニュースを聞いたり新聞を読んだり、アニメの背後にある日本の文化や社会の諸相を研究したり、社会現象として日本のポップカルチャーを研究して論文を書いたり、中世の絵巻物や浮世絵と現代のマンガやアニメの比較研究をするかもしれない。ひとりの学習者が自らの知的関心に気づき、そのためには日本語でこれができなければいけない、あれもできなければいけない、と自発的な学習動機を発展させ、知的好奇心の持続可能な連鎖を生

み出していくとき、プロフィシェンシーは育まれ、国際文化交流は拡大し、深まっていきます。

学習者ひとりひとりが、JLPTの「よきユーザー」として、日本語で「できること」の花束を将来に向けてますます大きくしていけば、もっと多くの人と、もっと深くつながって、異なる文化背景や考えや新しい価値に目を開き、将来に向けたきずなが強まります。みなさんも、国際文化交流というコミュニケーションについて考えるとき、そうだ、言語によるコミュニケーションと必ずしも言語によらないコミュニケーションがあるんだった、そして言語によるコミュニケーションを深めていく「一里塚」のような存在として、日本語能力試験というものがあつたな、と思い出して頂ければと思っています。